

働くことの意味の変化

『日本労働研究雑誌』編集委員会

人はなぜ、何のために働くのか、働くことは人々に何をもたらすのか。「働くことの意味」に関する議論は、工場労働に典型的な近代的労働の誕生以来、労働疎外、苦役からの解放、労働の人間化、近代的労働の超克といった主題で論じられてきた。一生の多くの時間を労働に費やす大多数の人々にとって、労働観の議論は「近代で生きること」を問う主題でもあった。啓発書、キャリア教育などでも「働くことの意味」は頻出テーマであり、自分の仕事経験の質は日々の暮らしの中でも大きな問題である。

近年、テクノロジーや労働環境、そして人々の意識が時代とともに変化するにつれ、働くことの意味も大きく変化しつつある。なかでも、2000年代以降の経済のグローバル化、ICTの進展、サービス経済化を背景とした雇用の柔軟化における意味の変化は、従来の議論に新たな論点を加える動きである。

とりわけ、不安定化する雇用環境の中で、個人の内面からどのように組織労働を支えるのかという観点には、重要な論点である。企業や福祉国家にとっては、労働者の積極的な労働観と勤勉性は企業経営や福祉システムが安定に機能するための前提のひとつである。

そこで本特集では「働くことの意味」の変化を、個人的に経験される側面と、労働観の思想史的変遷という2つの観点から考察する。

米田論文は、国際比較データをもとに、過去20年間で、日本人にとって、働くことの内面的な意味づけが希薄化した時期であったことを指摘している。私生活より仕事を大事にする仕事中心性は、1980年代前半の時点ではきわめて高かったが、近年では経済的豊かさに概ね見合ったレベルとなった。仕事へのコミットメントは、2010年代には、金銭的・手段的な志向が高いのに対して、非-金銭的な志向は大きく低下してきた。仕事満足度は一貫して低かったが、2010年代にはさらに低下していった。総じて、日本人にとって、以前ほど仕事は生活の中心ではなくなり、働くことその

ものに積極的な意味を見出しにくくなってきている。

浦田論文は、人生の意味の心理学をもとに、仕事における主観的な意味の研究の変遷をもとに、多様な側面を持つ「仕事の意味」に関する概念を整理し、仕事の意味が、個人の自己実現や自己成長といった自己志向にとどまらず、他者やより大きな利益への貢献などの他者志向を含んだ多次元的な概念化が進んできたことを確認する。その上で、仕事の①個人的意味、②関係の意味、③社会的／普遍の意味、④宗教的／スピリチュアルな意味という4つの分析レベルを設定し、それぞれの近年の知見を整理している。

上村論文は、労働思想と社会福祉制度の黎明期を手がかりにしつつ、現代において働くことの意味を持続し得ない、危機的な状況と、それを生み出す今日的な雇用環境とテクノロジーの進展について確認する。正規雇用中心の安定した雇用に対して、ギグワーカーのような新しいタイプの不安定労働が広がりつつある。上村論文は、この状況の中でディーセントワークを支える仕組みとして、ベーシックインカムと社会的投資の可能性を検討している。

金野論文は、近代的組織労働の積極の意味づけの歴史的形成を、その負の側面にも注目し検討している。現代社会は、西欧の思想史で支配的であった消極的な労働観を転換しただけでなく、パーソナルな意味に結びつける規範や思潮が広く普及していった時代である。その過程で自己、生活、市民性といった重要な社会領域が、このような労働概念のもとで制約を受けてきた。同時に、雇用の多様化により、働くことの意味の希薄化も進んでいる中で、自律的で創造的な労働の場を構想することの必要性を論じている。

本特集が、更なる研究の発展に繋がることを期待する。

責任編集 山下充・江夏幾多郎・池田心豪
(解題執筆 山下充)